
テキストの都市としての聖都アビラ

——ガルシア・ロルカ、セラそしてデリーベスの記述を中心に——

小阪 知弘

要 旨

イベリア半島北西部に位置する城壁都市アビラは幾人かの優れたスペイン人作家たちによって文学的及び詩的題材として取り上げられ、描写されてきた。そこで本稿では、ベンヤミンの提唱する哲学概念である〈遊歩者〉の視座から「歩行する身体」を媒介にして、「テキストの都市」としてのアビラの都市分析を展開させる。具体的に、ガルシア・ロルカ、カミロ・ホセ・セラそしてミゲル・デリーベスの文学テキストに登場するアビラに纏わる記述を分析対象に選定して、これら3人の作家が紡ぎ出した言説のテキスト分析をおこなうことにする。テキスト分析を通して、アビラは男性的な「騎士の町」であると同時に、女性的な「サンタ・テレサの町」という二面性を内包する都市空間であることを理解できる。また、石によって形成された歴史都市アビラは、月光に照らされ雪に包まれた町として詩的に結晶化していることも見えてくる。3人のスペイン人作家による記述を整合すれば、「テキストの都市」としてのアビラはサンタ・テレサの精神が息づいているだけでなく、神も遍在する聖都であると結論づけることができるのである。

Ávila, ciudad medieval amurallada, situada en la Península Ibérica, ha sido descrita poéticamente por los escritores españoles en sus obras. En este artículo analizaremos Ávila como texto literario desde el punto de vista del término filosófico “flaneur” (vagabundo perdido), definido por Walter Benjamin. Para analizar dicha ciudad amurallada, nos referiremos a las descripciones de García Lorca, Camilo José Cela y Miguel Delibes. Entendemos que Ávila es una ciudad espiritual que contiene una dualidad: la ciudad de los Caballeros y la de Santa Teresa. De este análisis descriptivo, llegamos a la conclusión de que Ávila es una

ciudad sagrada donde no solamente se encuentra el espíritu sublime de Santa Teresa, sino que también está omnipresente el Dios católico.

1. はじめに

イベリア半島北西部に位置する城壁都市アビラは幾人かの優れたスペイン人作家たちによって文学的及び詩的題材として取り上げられ、描写されてきた。そこで本稿では、フェデリコ・ガルシア・ロルカ (Federico García Lorca : 1898-1936)、カミロ・ホセ・セラ (Camilo José Cela : 1916-2002) そしてミゲル・デリーベス (Miguel Delibes : 1920-2010)、という 20 世紀スペイン文学を代表する 3 人のスペイン人作家によるアビラの都市描写を紐解きながら、文字によって現前化された「テキストの都市」としてのアビラの姿を浮き彫りにしていくことにする。

2. 〈遊歩者〉の視座と「歩行する身体」

「テキストの都市」としてのアビラ的全貌を明らかにしていくために用いる方法論をここで提示しておくことにする。本稿では、〈遊歩者〉の視点に基づいた「歩行する身体」を媒介として、「テキストの都市」としてのアビラの都市分析を展開させることにする。〈遊歩者〉(flaneur) は、ヴァルター・ベンヤミンが『パサーージュ論—Ⅲ フラヌール 都市の遊歩者』(1982)において提起した哲学概念である。〈遊歩者〉はベンヤミンが 19 世紀のパリの都市空間に発見した、具体的な目的を持たずに街路を徘徊する人物像のことを指す¹⁾。ベンヤミンは〈遊歩者〉の姿を以下のように詳述している。

遊歩者が町を徘徊するときに耽っているあの追憶としての陶酔の素材となるのは、彼に感覚的に見えるものではない。この陶酔はしばしば、ただの知識を、

いや埃にかぶった資料さえも、自ら経験した生きたものであるかのように吸収するのである。(ベンヤミン 1994 : 70)

また、ベンヤミンは〈遊歩者〉に内在する分析者としての視座を、「遊歩者は市場の観察者である」(ベンヤミン 1994 : 92) と記述し、「遊歩者の姿の中には探偵の姿があらかじめ形成されている」(ベンヤミン 1994 : 123) と強調している。さらにベンヤミンは〈遊歩者〉が生得的に備える詩人のまなざしを以下のように論述している。

自らの無為によってパサージュからなる想像の町を運ばれて行く遊歩者においては、ダンディが詩人に立ち向かう(ダンディは、自分が曝されている衝撃に気を止めることもなく、群衆の中を歩いて行く)。だが、遊歩者の中には、とっくに消息不明になっている一人の被造物が夢み心地の、詩人の魂の奥底まで射抜くまなざしを開いているのである。(ベンヤミン 1994 : 363)

引用した〈遊歩者〉の有する詩人のまなざしに留意しながら、都市に内在する詩的要素にも着目して論述を進めていくことにする。

櫻井進は『〈半島〉の精神誌』(1995)において、ベンヤミンの『パサージュ論』の哲学的思想を踏襲しながら、「歩行する身体」に関して以下のように論述している。

歩行は、われわれの身体にいまだ経験されることのなかった新たな生の様式をもたらすものではないだろうか。人は精神に危機が訪れたとき、自明で疑うことのできない現実の強固さを前にして、現実からの離脱の夢想に身を委ねる。そのとき、もっとも自明でありふれた行為である歩行がまったく異なった様相を帯びはじめ、旅への強い衝動が生まれる。精神の危機は身体の危機でもあるとしたら、危機からの脱却を可能にするのは、身体的な行為なのではないだろうか。そういった考えにうながされながら、歩くことに新たな意味を見いだし

始めている。(櫻井 1995 : 123)

ベンヤミンの唱える〈遊歩者〉の視座と櫻井の定義する「歩行する身体」をスペインの都市分析に適用することの有効性は、98年世代に属するスペインの詩人、アントニオ・マチャード (Antonio Machado : 1875-1939) の詩的言説を通して立証することができる。マチャードは旅における歩行の重要性を詩集、『カスティーリャの原野 (*Campos de castilla*)』(1907-1917) の一角を成す「格言と歌 (*Proverbios y cantares*)」と題した詩作において以下のように表現している。

Caminante, son tus huellas	旅人よ、あなたの足跡こそ道であり、
el camino, y nada más;	ただそれだけなのだ。
Caminante, no hay camino,	旅人よ、道はなく、あなたが歩けば、
se hace camino al andar.	道はできる。
Al andar se hace camino,	歩いた後、道はでき、
y al volver la vista atrás	振り返れば、二度と踏むことのない
se ha de volver a pisar.	小道が眼前に広がっている。

(Machado 2009: 232-233)

マチャードの紡ぎ出したこれらの詩節を一読すれば、〈遊歩者〉の視座から「歩行する身体」を介してスペインの都市分析に着手する有効性が見えてくる。具体的な都市分析に移行する前に、アビラの都市構造を把握しておくことにする。

3. アビラの都市構造

アビラは周囲を城壁に囲まれた中世の面影を色濃く留める町である。グレ

ドス山脈の北側に位置するアビラはマドリードから北西 108 キロメートル、海拔 1131 メートルに位置するスペインで最も高い地点に在る都市である。ローマ時代に「アウェラ (Awila)」と呼ばれていたのが、音声変化して「アビラ」という名称に定着したのである。ヘラクレスが建設した町という言い伝えがあるが、レコンキスタ (711-1492) 前半期には、イスラム教徒たちによって占領されていた時期もあった。だが、1085 年にカスティーリャ王国のアルフォンソ六世がアビラをイスラム教徒の手から奪回し、キリスト教徒の町となった。キリスト教化以降、アビラはレコンキスタの拠点となり、今日に至っている。

空間的観点からすれば、アビラの町は旧市街内にあるビクトリア広場を中心点として構造化されているが、神学的知見から町を概観すれば、サンタ・テレサ広場 (Plaza de Santa Teresa) が精神的中心点として機能している。アビラは、全長 2572 メートル、高さ平均 12 メートル、厚さ 3 メートルから成る城壁を有する都市である。城壁は 88 の櫓と 9 の城門を備えている。ドイツのローテンブルクやフランスのカルカソンヌなどと同様、中世ヨーロッパの典型的な城壁都市だと言える。アビラの城壁は 2 つの局面の間にある境界として城壁の内部と外部を明確に区別する。

境界としての城壁は構造を持つ内部、すなわち生活空間を形成し、構造を持たない外部、すなわち自然を切り離す²⁾。前田愛は『都市空間のなかの文学』(1982)において、城壁都市の特性を以下のように説明している。

周囲に城壁をめぐらすことで、農村的な自然と対峙する生活空間を構築した中世ヨーロッパの都市像は、やがてその正と負の両極に、隔離と懲罰の装置としての監獄と、人間の自由と解放を約束するユートピアの幻想をつくりだす。(前田 2008 : 202)

そういった意味で、アビラは背景を借景として取り入れる日本の諸都市や花

や植物で満たされた中庭（^{パティオ}patio）を家の内部空間に取り込むアンダルシアの都市群とは対極に位置する典型的な中世ヨーロッパ型都市だと言える。城壁西側の高みにある〈四本柱〉（Cuatro Postes）から、アビラの町の全貌が見渡せ、その景観は筆舌に尽くしがたい。城壁に守られたアビラは「騎士の町」とも呼ばれる。その理由はアビラの正式名称に起因している。アビラの正式名称は「騎士の町アビラ（Ávila de los Caballeros）」である³⁾。

4. サンタ・テレサの町

アビラは「サンタ・テレサの町」という異名を持つ。アビラ出身の都市論研究者、アルバロ・マテオス・ロペスが “No sería posible entender la figura de Santa Teresa sin Ávila ni la de Ávila sin su Teresa”（Mateos López 2018 : 116）「アビラがないとサンタ・テレサの人物像を理解することはできないだろうし、また、サンタ・テレサがないとアビラの都市像を理解することはできないであろう」と言及している。なぜなら、アビラは 1622 年に列聖された聖女、サンタ・テレサ・デ・ヘスス（Santa Teresa de Jesús : 1515–1582）が生まれ、その生涯の多くの歳月をカトリック信仰のために捧げた町だからである。ユダヤ系新キリスト教徒の貴族の家に生まれたサンタ・テレサは、19 歳の時に出家し、カルメル会修道院に入信し、清貧と神への献身を掲げ、その生涯を信仰に捧げた。サンタ・テレサは 1562 年に宗教改革を志して、「裸足のカルメル会修道院」を創設した。

サンタ・テレサが 29 歳まで過ごしたエンカルナシオン修道院には、もうひとりの神秘主義者サン・ファン・デ・ラ・クルス（San Juan de la Cruz : 1542–1591）とサンタ・テレサが神について語り合ったという面会室がある。彼女の生家跡に建てられたサンタ・テレサ修道院には、聖女の指がガラス箱に収められ、展示されている。モーリス・バレスが『エル・グレコトレードの秘密』（1923）において、この町のことを「聖都アビラ」と呼ぶのはサンタ・

テレサによるカトリック信仰の息づく町という理由からである（パレス 1996：52）。ではここから具体的な文学テキストを参照しながら、「テキストの都市」としてのアビラの全貌に焦点をあてていくことにする。

5. テキストの都市としてのアビラ

アビラの都市空間を分析するために、前述した3人のスペイン人作家たちが紡ぎ出したテキストを参照していくことにする。まず、ガルシア・ロルカの詩的散文集である『印象と風景（*Impresiones y paisajes*）』（1918）の断章である「アビラ（Ávila）」を取り上げる。続けて、カミロ・ホセ・セラの『サッカーと11の寓話（*Once cuentos de fútbol*）』（1963）に収められている短編、「騎士の町、アビラの郷愁（*Nostalgia de Ávila de los Caballeros*）」に言及する。最後に、作品世界の主要場面がアビラで展開するミゲル・デリーベスの小説、『糸杉の影は長い（*La sombra del ciprés es alargada*）』（1947）を分析する。

5.1. ガルシア・ロルカによる記述

ガルシア・ロルカは『印象と風景』の一角を成す断章、「アビラ」において、詩的描写を駆使しながら「テキストの都市」としてのアビラの姿を浮かび上がらせている。具体的に、ロルカは「サンタ・テレサの町」としてのアビラの姿を以下のように静謐な筆致で記述している。

Nadie debe de hablar ni de pisar fuerte para no ahuyentar al espíritu de la sublime Teresa...⁴⁾ (García Lorca 1997: 58)

崇高なテレサの精神を払いのけることがないよう、誰ひとりとして大声で話したり、荒々しく大地を踏みつけてはならない…

引用した描写から、ロルカがアビラの都市空間内にサンタ・テレサの精神が宿っていると考えていることが窺える。また、ロルカは「騎士の町」として

のアビラの面影にも着目しながら、次のように綴っている。

O contemplar a un grupo de caballeros con plumas y lanzas, que embozados en capas rondaran la muralla. (García Lorca 1997: 58)

あるいは羽飾りをつけ、槍を持った騎士の一団がマントで顔を隠しながら城壁のまわりを夜警しているのが見えるような気がする。

続けてロルカは “Ávila es la ciudad más castellana y más augusta de toda mesesa colosal...” (García Lorca 1997: 58) 「アビラは広大な中央台地の中で最もカステリーリャ的かつ高貴な都市である…」と喝破している。そして、ロルカはアビラの大聖堂を以下のように荘厳に叙述している。

La Catedral, formidable en su negrura sangrienta, cuya cabeza epopéyica tiene por cerebro al Tostado, dejó escapar la miel de sus torres y las campanas lo llenaron todo de religiosidad ideal..... El interior de templo es abrumador por su sombra pasada incrustada en sus paredes y por su oscuridad tranquila, que invita a la meditación de lo supremo.

El alma que crea y esté llena de fe celestial, que sueñe en esta Catedral que levantaron aquellos reyes de hierro de una edad guerrera. El alma que vea la grandeza de Jesús que se suma en estas sombras húmedas con ojos de cirios para sentir consuelo espiritual.....(..) Esta Catedral hace pensar aunque el alma que pasee sus galerías esté desposeída de la luz de la fe..... (García Lorca 1997: 59)

カテドラル
大聖堂は血なまぐさい暗がりの中、威風堂々と屹立し、その英雄的な頭上にはアロンソ・デ・マドリガル、通称、トスタードを従え、塔からは蜜の香りを漂わせている。鐘の音は理想的な信仰心であたりを包み込む…寺院の内部は壁に刻み込まれた過去の陰影や崇高なるものへの瞑想へと誘う静謐な暗がりに覆われている。

カテドラル
戦国時代を生きた鉄の魂を持つ王侯貴族が建設したこの大聖堂の中で、夢想し、思いを巡らせ、天国への信仰に満ち溢れている魂がある。主イエス・キリストの偉大さを見出し、精神の慰めを感得しようと、大きな蠟燭の目を持つこのじめじめした暗闇の中で、沈思する魂がある。(中略) 回廊を渡る者がたとえ信仰の光を失っていたとしても、この大聖堂は人を瞑想へと導く…

ロルカはアビラにおけるカトリック信仰の中心地である大聖堂^{カテドラル}を詩的に描写しながら、同都市に神が遍在することを指摘している。そして、ロルカはアビラが人を瞑想へと誘う信仰の光を生得的に備える静謐な都市空間であることを強調しているのである。

5.2. カミロ・ホセ・セラによる記述

1988年にノーベル文学賞を受賞したカミロ・ホセ・セラは『サッカーと11の寓話』の5番目に収められている短編、「騎士の町、アビラ」においてサッカーを媒介としながら、アビラの都市空間を描写している。セラは同短編の書き出しを以下のように構成している。

Sancho Adaja, el Mozo, juega al fútbol a la sombra de las murallas, más allá de la puerta que dicen del Carmen, que la quiebra a la usanza mora, y antes de llegar al mirador de los Cuatro Postes, donde los novios se sienten paladines cristianos o respetuosos menestrales judíos (relojeros, dulceros, sacristanes), según.⁵⁾ (Cela 1972: 47)

若者サンチョ・アダハは、城壁の陰で、サッカーをしている。そこはモーロ風に城壁を割って造られている通称カルメン門よりも向こう側で、〈四本柱〉の見晴台よりは手前で、恋人たちが武勲を挙げたキリスト教戦士のつもりになったり、尊敬すべきユダヤ職人（または時計屋、菓子職人、教会の香炉係）のつもりになったりする場所である。

セラはこの短編の主人公であるサンチョ・アダハの視点を媒介として9つあるアビラの城門のうち最も強固なカルメン門を取り上げながら、アビラの都市空間のランドマークであると同時に精神的及び宗教的なシンボルである〈四本柱〉を活写している。サンチョ・アダハの言動を媒介として、セラはアビラが郷愁を誘う町であることを次のように明記している。

A la sombra de las murallas, más allá de la puerta del Carmen... Sancho Adaja, el Mozo, no puede jugar al fútbol sino a la sombra de las murallas; cuando lo meten en el tren y se

lo llevan, por España adelante, a jugar en otros escenarios, a Sancho Adaja, el Mozo, le zurra la nostalgia y no acierta. (Cela 1972: 48)

城壁の影、カルメン門の向こう側でサンチョ・アダハはサッカーができない。他の舞台でプレーをさせようと、若者サンチョ・アダハを列車に押し込み、スペイン各地に連れていくと、郷愁に打ちのめされて、ゴールを決めることができなくなってしまうのだ。

「郷愁に打ちのめされて」という言説を考慮すれば、アビラは同地を離れると郷愁を誘う町であることが露見してくる。続けてセラはオオタカに言及しながら、「郷愁の都市」としてのアビラを以下のように現前化させている。

El azor es ave noble, pájaro militar, plumón que vuela por encima de las nubes desafiando al mundo. El azor es también (según cómo se mire) bestezuela añorante y molino de nostálgica y honda tristeza. (...) También le falta pasión a Sancho Adaja, el Mozo, para darlas (a derechas y con fundamento) allá donde no llega la sombra familiar de sus murallas de Ávila, esa nostalgia. (Cela 1972: 51)

オオタカは気高い鳥で、鳥類の軍人でむく毛をまとい、世界を挑発しながら雲の上を飛んでいく。オオタカはまた（見方によっては）、過去を懐かしむ生き物で、郷愁に彩られた深い悲しみを抱く風車のごとき獣である。（中略）若者サンチョ・アダハは、あの慣れ親しんだアビラの城壁の影、あの郷愁が届かぬ向こうへ、城壁を〈残らず全て〉譲渡するほどの情熱も備えてはいない。

セラは過去に対する郷愁と深い悲しみを表象する隠喩としてオオタカを登場させながら、石に刻まれた過去をそのまま城壁内に包摂する「郷愁の都市」アビラの姿を見事に叙述している。また、セラは雪降るアビラの景観を以下のように詩的に紡ぎ出している。

Hace ya algunos años, tampoco muchos, cuando Sancho Adaja, el Mozo, no era todavía un mozo, y don Pelayo y don Rubín de Bracamonte II lucían aún el pálido y sentimental semblante de los misacantanos, cayó sobre la piedra de Ávila una nevada histórica, una

nevada de blanquísimo y manso engrudo celestial que pintó de brillador albayalde hasta las negras conciencias del verdugo, del usurero y del confidente. (Cela 1972: 49)

何年前、と言ってもそれほど昔のことではないが、若者サンチョ・アダハがまだ若者ではなく、ドン・ペラヨとドン・ルビン・デ・ブラカモンテ二世の青白く感傷的な司祭の顔が、まだ輝いていた頃、アビラの石の上に、滅多に降らない歴史的な雪が、天空の粉を思わせる真っ白な雪が静かに降り注ぎ、死刑執行人や高利貸しや密告者の黒い心まで、まばゆい白銀に染めてしまったのだ。

天から降り注ぐ雪景色に纏わる詩的描写を通して、セラはアビラに舞い降りてきた真っ白な雪に内在する心を清める聖性を記述している。そして、セラはアビラの都市空間内に宿る神の存在を以下のように指摘している。

Dios Todopoderoso, cuando ordenó al sol que vistiera otra vez de estameña al paisaje, sembró en el corazón de Sancho Adaja, el Mozo, el cauteloso vientecillo de la nostalgia sin principio ni fin: ese soplo de inconcreto amor de mansedumbre. (Cela 1972: 49-50)

全能なる神は太陽に向かって、景色に再び羊毛織の服を着せるよう命じる一方で、若者サンチョ・アダハの心の中に、始まりもなければ終わりもない用心深い郷愁の風、穏やかで曖昧な愛の息吹を植えつけた。

アビラに宿る全能なる神がサンチョ・アダハの心の中に郷愁と愛の息吹を植えつけたと綴っているように、セラはアビラの都市空間内に全能なる神が宿っていると捉えているのである。

5.3. ミゲル・デリーベスによる記述

二十世紀スペイン文学を代表する小説家の一人であるミゲル・デリーベスは処女作『糸杉の影は長い』において、中世の佇まいがそのまま保存されたアビラの都市空間を以下のように素描している。

Yo nací en Ávila, la vieja ciudad de las murallas, y creo, que el silencio y el recogimiento

casi místico de esta ciudad se me metieron en el alma nada más nacer. No dudo de que, aparte otras varias circunstancias, fue el clima pausado y retraído de esta ciudad el que determinó, en gran parte, la formación de mi carácter.⁶⁾ (Delibes 2011: 13)

私は古い城壁都市であるアビラに生まれた。この町の神秘的なまでの静謐さと閉鎖性が、生まれてからずっと私の心の中にしみこんでいると思う。ほかの様々な環境はともかくとして、この町の静かで閉鎖的な雰囲気が私の人格形成におおいにかかわってきたことに疑う余地はない。

デリーベスはランドマークとしての^{カテドラル}大聖堂に焦点をあてて、〈四本柱〉から見渡した十一月の城壁都市アビラの景観を以下のように比喻を駆使しながら、壮大に叙述している。

Pasamos el puente y ya en la carretera de Salamanca nos desviamos a la derecha. Teníamos Cuatro Postes al alcance de la mano. Ascendimos el promonitorio y don Mateo se sentó en el pedestal de la cruz. Nosotros lo hicimos a su alrededor.

—Mirad—nos dijo de repente señalando frente a él.

La ciudad amurallada, quieta en aquella sugestiva y misteriosa. Caía por sus extremos como si estuviese colocada a horcajadas de alguna gigantesca cabalgadura. La catedral y otros edificios altos destacando sobre las casas vecinas, lo mismo que los días excepcionales del año transcurrido resaltaban en mi memoria sobre la uniformidad gris de los demás. (Delibes 2011: 69)

橋を渡り、サラマンカ街道を右へそれた。わたしたちの手の届くところに〈四本柱〉があった。高台へ登り、ドン・マテオは十字架の台座に腰をおろした。わたしたちはその周りに同じように座った。

「見てごらん」とドン・マテオはふいに正面を指して言った。十一月の穏やかな午後の城壁に囲まれた町は、そこから見ると意味ありげで不可思議な姿を見せていた。町はまるで巨大な馬にでもまたがっているかのように両端が下がっていた。^{カテドラル}大聖堂とその他の高い建物が周辺の家々に抜きんできてそびえ立っている。その光景は、過ぎ去った年月の特別な日々が、私の記憶における他の灰色一辺倒の日々の中で際立っているのと同じだった。

引用した叙述の中で注目に値するのは、デリーベスが城壁都市アビラを「町はまるで巨大な馬にでもまたがっているかのよう」だと形容している点である。また、デリーベスは中世の風情をそのまま留めているアビラの様相を登場人物の一人である船乗りのドン・フェリペに“viven aquí como en plena Edad Media”「ここでは中世まっただ中のような暮らしじゃないですか」(Delibes 2011: 88)と発話させている。そして、デリーベスは風格を備える城壁都市アビラの雪景色を次のように観照している。

La ciudad amurallada se recostaba sobre el fondo rosáceo del cielo con toda su impresionante altivez de reliquia donde se amontonaban los siglos en portentoso equilibrio. (Delibes 2011: 97)

驚異的な均衡の中で数世紀もの時の巡りを雄大に積み重ねてきた遺跡の醸し出す堂々たる風格を備えた城壁都市が、バラ色の空を背景にして雄大に横たわっている。

続けて、デリーベスは雪に包まれた時の変化に流されないアビラの中世的な夜の情景を主人公ペドロの視点を媒介にして以下のように神秘的に表現している。

Por primera vez comprobé que Ávila de noche, nevada y con luna, se encontraba consigo misma. Exhalaba su aroma de siglos sin bastardearle con modernas impresas; con hábitos, modas y costumbres en discrepancia con su añeja raíz. (Delibes 2011: 116)

雪に包まれ、月の光に照らされた夜のアビラがそこにあるのを初めて私は体験した。現代の慣習、流行、風習などの不純物に汚されず、昔から根底にある幾世紀もの芳香をアビラは放っていた。

また、デリーベスは中世の趣を色濃く留める都市アビラが、スペインの他の諸都市と違って歴史の根付く風格を備える町であることを以下のように力説している。

En este instante comencé a presentir que Ávila no era una ciudad como las demás. Tenía sus raíces clavadas en la Historia a diferencia de otras. La Historia la vigorizaba en su secuela moderna, le proporcionaba su substancia vital, la coloreaba de un matiz especial, con la verdad e impresionante pátina del tiempo... (Delibes 2011: 69-70)

この瞬間、アビラは他の町とは違っていることに私は気づき始めた。他の町と違って、アビラには歴史がしっかりと根を下ろしているのだ。歴史が町の現在の姿に活力を与え、活気溢れる様相をもたらし、緑がかった印象深い古色が歳月を得て特別な風格を付与している…

このように、デリーベスは歴史的視座から中世の風情漂う都市アビラを観察し、特別な風格を備える町と判断している。そして、デリーベスは主人公ペドロの「歩行する身体」を通して、アビラの精神的中心点として機能しているサンタ・テレサ広場の冬の情景を以下のように素描している。

El día era frío y aunque el sol se había asomado durante unas horas, no pudo con la nieve ni el hielo que forraban la ciudad. Salimos a la Plaza de la Santa por la puerta de Alcázar. La plaza estaba transformada en una gran pista del hielo. (Delibes 2011: 47)

その日は寒かった。何時間か太陽が顔をのぞかせるのだが、町を覆っている雪と氷に太刀打ちできなかった。私たちはアルカサル門を通り抜けて聖女広場（サンタ・テレサ広場のことー引用者註）へ出た。広場は壮大な氷の舞台へと化していた。

引用した場面において、デリーベスは雪と氷で形成されたサンタ・テレサ広場の凍てつく光景を巧みな筆致で描き出している。同様に、デリーベスは神学的観点から、「サンタ・テレサの町」としてのアビラの様相を、主人公ペドロと彼の先生であるドン・マテオ及びその娘のマルチーナとの発話場面を媒介にして以下のように洞察している。

Don Mateo contempló la ciudad durante un gran rato; luego, mirándonos a los tres dijo:

—En este punto alcanzaron a Santa Teresa cuando huía con su hermano a tierra de moros.

Los ojos de Martina, redondos y claros, estaban clavados en la liviana humanidad de su padre.

—¿Y por qué?

—Escapaba para sufrir martirio por Dios.

—¿Y por qué?

—Porque era muy buena; una santa; una gran santa... (Delibes 2011: 69)

ドン・マテオは長い時間、町を眺めていた。そして、3人を見ながら言った。「サンタ・テレサが弟と一緒にイスラム教徒の地へ逃げようとしたとき、ちょうどこの場所で追いつかれた」

マルティーナは丸くて澄んだ瞳で父親の痩せた身体をじっと見つめている。

「なぜですか？」

「神への殉教の苦しみから逃れたかったのだ」

「でも、どうして？」

「とても誠実なひとだったから。聖女、偉大な聖女だった…」

引用した師弟による発話場面では、神学的対話が繰り広げられており、デリーベスはサンタ・テレサを「偉大な聖者」と高く評価しているのである。また、デリーベスはアビラの都市空間にサンタ・テレサの精神が宿っていることを以下のように克明に描写している。

Ávila emergía de la nieve mística y escandalosamente blanca, como una monja o una niña vestida de primera Comunión. (...) Imaginé que no otra, en todo el mundo, podía ser la cuna de Santa Teresa. Porque su espíritu impregnaba, una por otra, cada una de sus piedras y sus torres. (Delibes 2011: 117-118)

神秘的にそして騒々しいほどに真っ白な雪の中で、アビラの町はあたかも初聖体を受ける尼僧か少女のような風情で佇んでいた。(中略)世界のどのような場所もサンタ・テレサの揺り籠の地にはなれないと私は思った。なぜなら石や塔のひとつひとつに彼女の精神が浸透しているからだ。

この記述の中で「アビラの町はあたかも初聖体を受ける尼僧か少女のような

風情で佇んでいた」と記しているように、デリーベスはアビラの町をカトリック信仰の息づく女性空間と捉えている⁷⁾。また、デリーベスは同城壁都市の都市空間内に点在する石や塔に至るまでサンタ・テレサの精神が浸透していることを強調しながら、アビラとサンタ・テレサの間に介在する不可分な関係性を的確に指摘している。

同様に、デリーベスはアビラから国際的な芸術都市バルセロナへと移り住んだ主人公ペドロの視点を通して、アビラとバルセロナの比較都市論を以下のように緻密に展開させている。

Recién llegado de Ávila recuerdo que Barcelona me causó una impresión violenta. Algo así como si de un solo salto hubiese pasado de la serenidad mística de un convento a la vitalidad laboriosa y activa de un gigantesco taller. (Delibes 2011: 172)

アビラから着いたばかりの頃、私はバルセロナから強烈な印象を受けたのを覚えている。それは神秘に満ちた静謐な修道院から、ひとつ飛びで活気と労働に溢れる巨大な工場へ移ったようなものだった。

引用した比較都市論をめぐる言説において、デリーベスはバルセロナを「活気と労働に溢れる巨大な工場」と叙述しているのに対して、アビラを「神秘に満ちた静謐な修道院」と描写している。続けて、デリーベスは〈遊歩者〉の視座から主人公ペドロの「歩行する身体」を媒介として、アビラとバルセロナを以下のように比較している。

Las dimensiones de la ciudad me impresionaron tanto como su psicología. Echaba de menos mis paseos por la periferia de Ávila, donde bastaban pocos minutos para rodear la ciudad completamente. Aquí había de conformarme con recorrer un par de calles sin fin para regresar a casa más cansado que si en Ávila hubiese dado cinco vueltas seguidas a la muralla. (Delibes 2011: 172)

精神面と同じように、町の大きさにも私は衝撃を受けた。町をひと回りするのに数分もあれば足りるアビラでの郊外の散歩が懐かしかった。ここでは果て

しない街路をふたつかみつつ歩くだけで良しとしなければならなかった。それでもアビラで城壁のまわりを立て続けに5回巡ったよりも疲れて家に戻ることになるのである。

デリーベスは城壁都市と巨大な国際都市バルセロナとを比較対照させながら「町をひと回りするのに数分もあれば足りるアビラ」と形容している。そして、デリーベスはバルセロナの街路を散歩することは、「アビラで城壁を立て続けに5回巡ったよりも疲れて家に戻るようになる」と明言し、〈遊歩者〉の視座に立脚しながら主人公ペドロの「歩行する身体」を介して、アビラとバルセロナの比較都市論を見事に展開させている。

同小説の主人公ペドロはアイルランド系アメリカ人の婚約者ジェーンを交通事故で亡くした後、故郷アビラの風景を述懐し、アメリカ合衆国からアビラへと帰郷することになる。デリーベスは主人公の発話を通して、「原風景」⁸⁾としてのアビラの夜の情景を以下のように浮かび上がらせている。

Una noche, en viaje ya de regreso a España, recordé a Ávila, la Ávila única, maravillosamente pálida y alada de una noche de plenilunio. La rememoré con ansias anormales, casi bestiales de poseerla, identificarme con ella, de relajar a su amparo de mi atormentado espíritu y dejarle que impregnase de su añeja y nostálgica substancia. Fue este deseo el único que se hizo fuerte en mí, que me poseyó con la más enérgica crudeza desde la trágica desaparición de Jane. (Delibes 2011: 338)

スペインへの帰路にあった夜、私はアビラを思い出した。見事なまでに青白く冴え渡った満月の夜、ただひとり荘厳に翼を広げて佇むアビラの姿を。自分のものとし、アビラと同化し、その庇護のもとで魂の苦しみを和らげ、懐かしい追憶に取り込まれるがままになっていたいという異常とも言うべき熱意をもって私はアビラを思い出していた。それがジェーンの悲劇的な死の後、私の心を強く捉えて離さない唯一の望みであった。

この発話で興味深いのは、デリーベスが主人公にとっての心の中の「原風景」

としてのアビラの夜景を「満月の夜にただひとり荘厳に翼を広げて佇むアビラ」と詩的に描写している点である。別言すれば、デリーベスにとってアビラの夜の俯瞰図は「荘厳に翼を広げて佇む」姿をしているということなのである。

デリーベスは作品世界の結末場面において、カトリック信仰の息づく「サンタ・テレサの町」としての聖都アビラが本質的に備える深い神性を以下のように綴っている。

Me sonreía el contorno de Ávila allá, a lo lejos. Del otro lado de la muralla pertenecían Martina, doña Gregoria y el señor Lesmes. Y por encima aún me quedaba Dios. (Delibes 2011: 347)

あの遠くからアビラの城壁が私に微笑みかけていた。城壁の向こう側には、マルティーナ、グレゴリア夫人そしてレスメスさんがいる。さらに私にはいまだ神が在った。

ここまで進展させてきたテキスト分析から、デリーベスの抱くアビラの都市像を以下のようにまとめることができる。第一に、「アビラには歴史がしっかりと根を下ろしているのだ」という言説から、デリーベスはアビラが中世の面影の佇む歴史都市だと判断していることがわかる。また、デリーベスは同都市の包摂する二面性も指摘している。詳細には、「燕尾服を来た集会者たちの中で際立つ甲冑姿」という男性的な「騎士の町」として記しているだけでなく、「神秘に満ちた静謐な修道院」、「アビラの町はあたかも初聖体を受ける尼僧か少女のような風情で佇んでいた」と女性的な「サンタ・テレサの町」としても叙述していることから、デリーベスがアビラを二面性を備える都市空間と見做していることが明らかとなる。また、デリーベスは同都市の鳥瞰的な姿を「荘厳に翼を広げて佇むアビラ」と形容している。そして、「雪に包まれ、月の光に照らされた夜のアビラ」という詩的描写が物語っているように、デリーベスはアビラを雪に包まれた静謐な町と捉えているのである。

そして最終的に作品世界の結末場面において、「さらに私にはいまだ神が在った」と記述していることから、デリーベスはアビラを神が遍在する町と定義しているのである。

6. 結論

城壁都市アビラは「内」と「外」という空間的二項対立に基づいて構造化されているため、本質的に二面性を備える都市空間である⁹⁾。すなわち、アビラは男性的かつ戦闘的な「騎士の町」であると同時に、女性的でカトリック的な「サンタ・テレサの町」なのである。石によって形作られ中世の風情が漂う高貴な歴史都市アビラは、その地に住む住民と訪れる人々に深い感慨を与える「郷愁の町」である。また、詩的観点からこの城壁都市を概観すれば、アビラは月の光に照らされ雪に包まれた町として結晶化していることが明らかとなる。そして鳥瞰的視点から同都市の景観を一望すれば、アビラを荘厳に翼を広げた静けさの町と捉えることもできる。本稿において展開させてきたガルシア・ロルカ、セラそしてデリーベスによる記述をめぐる都市分析を整合すれば、「テキストの都市」としてのアビラを以下のように結論づけることができる。すなわち、石の十字架を中心点とする〈四本柱〉を抱く城壁都市アビラはサンタ・テレサの精神の息づく静謐な修道院都市であるだけでなく、神すなわち、主イエス・キリストの遍在する荘厳なる聖都なのである。

註

*本稿は2018年度南山大学パッへ研究奨学金I-A-2(一般)の助成を受けておこなわれた研究の成果である。／Este estudio se ha llevado a cabo gracias al fondo para investigaciones académicas Pache I-A-2 para el año académico 2018 de la Universidad Nanzan.／Funding for this study was provided by Nanzan University Pache

Research Subsidy I-A-2 for the 2018 academic year.

- 1) 〈遊歩者〉に関して、ベンヤミンは「遊歩者というタイプを作ったのはパリである」（ベンヤミン 1994：70）と明言している。
- 2) ロシア・タルトゥー学派の研究者であるユリー・M. ロトマンは空間を「内部と外部の対立」として捉え、「組織されたもの（構造を持ったもの）」と「未組織のもの（構造を持たないもの）」という二項対立の空間式図式として解釈している。詳細には、（ロトマン 1979：298-299）を参照のこと。
- 3) アビラの都市概要に関しては、（田尻 1998：110-112）を参照のこと。
- 4) ガルシア・ロルカによる記述の日本語訳は全て拙訳を用いることにし、以下のテキストから引用する。Federico García Lorca, *Obras completas, IV, Primeros escritos*, Galaxcia Gutenberg, Barcelona, 1997.
- 5) カミロ・ホセ・セラによる記述の日本語訳は全て拙訳を用いることにし、以下のテキストから引用する。Camilo José Cela, *Once cuentos de fútbol*, Madrid, Editora Nacional, 1972.
- 6) ミゲル・デリーベスによる記述の日本語訳は全て拙訳を用いることにし、以下のテキストから引用する。Miguel Delibes, *La sombra del ciprés es alargada*, Barcelona, Ediciones Destino, 2011.
- 7) 女性空間としてのアビラの都市の様相に関しては、（Díaz 1971：43）を参照のこと。
- 8) 文学的術語としての「原風景」に関して、奥野健男は『文学としての原風景』（1972）において、「“原風景” —安息する自己形成空間, 生活空間の原像」と定義している。詳細には、（奥野 1972：132）を参照のこと。
- 9) アビラの都市空間に内包された空間的二面性に関しては、（Alcalá Arévalo 1997-1998: 345-360）を参照のこと。

参考文献

- ALCALÁ ARÉBALO, Purificación (1997-1998). “Aplicación del modelo de análisis de la estructura narrativa propuesta por G. Genette a la novela *La sombra del ciprés es alargada*”, *CAUSE, Revista de Filología y su Didáctica*, núm. 20-21, pp. 345-360.
- CELA, Camilo José (1972). *Once cuentos de fútbol*, Madrid, Editora Nacional.

- DELIBES, Miguel (2011). *La sombra del ciprés es alargada*, Barcelona, Ediciones Destino.
- DÍAZ, Janet W. (1971). *Miguel Delibes*, New York, Twayne Publishers.
- GARCÍA LORCA, Federico (1997). *Obras completas, IV, Primeros escritos*, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 1997.
- MACHADO, Antonio (1989). *Poesías completas*, Edición de Manuel Alvar, Madrid, Espasa Calpe, (24ª. ed).
- MATEOS LÓPEZ, Álvaro (2018). *Enigmas y misterios de Ávila*, Madrid, Editorial Almuzana.
- PAUK, Edgar(1975). *Miguel Delibes: desarrollo de un escritor (1947-1974)*, Madrid, Editorial Gredos.
- PUENTE SAMANIEGO, Pilar de la (1986). *Castilla en Miguel Delibes*, Ediciones Universidad de Salamanca.
- RODRÍGUES, Jesús (1979). *El sentimiento del miedo en la obra de Delibes*, Madrid, Editorial Pliegos.
- TALAVERA MUÑOZ, María José (2007). “El concepto de desasimiento en *La sombra del ciprés es alargada*”, *Garzúa. Revista de la Sociedad Española de Estudios Literarios de Cultura Popular*, núm. 7.
- バシュラール, ガストン (2002) 『空間の詩学』(岩村行雄訳), 筑摩書房。
- バレス, モーリス (1996) 『グレコートレドの秘密』(吉川一義訳), 筑摩書房。
- ベンヤミン, ヴァルター(1994) 『パサージュ論—III 都市の遊歩者』(今村仁司他・訳), 岩波書店。
- ロトマン, ユーリー M. (1979) 『文学と文化記号論』(磯谷孝編訳), 岩波書店。
- 前田愛 (2008) 『都市空間のなかの文学』筑摩書房。
- 奥野健男 (1972) 『文学としての原風景』集英社。
- 櫻井進 (1995) 『〈半島〉の精神誌—熊野・資本主義・ナショナリズム』ノマド叢書。
- 田尻陽一 (1998) 『原色の旅 熱い新鮮 スペイン』昭文社。
- 田中純 (2007) 『都市の詩学』東京大学出版会。